

## 「きよめて聖なるものとする」

2005.9.11 赤羽聖書教会主日礼拝説教

21. キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい。

22. 妻たちよ。

あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。

23. なぜなら、

キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。

24. 教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。

25. 夫たちよ。

キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。

26. キリストがそうされたのは、

みことばにより、水の洗いをもって、

教会をきよめて聖なるものとするためであり、

27. ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、

聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。

28. そのように、夫も自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。

自分の妻を愛する者は自分を愛しているのです。

29. だれも自分の身を憎んだ者はいません。

かえって、これを養い育てます。

それはキリストが教会をそうされたのと同じです。

30. 私たちはキリストのからだの部分だからです。

31. 「それゆえ、人はその父と母を離れ、妻と結ばれ、ふたりは一心同体となる。」

32. この奥義は偉大です。

私は、キリストと教会とをさして言っているのです。

33. それはそうとして、

あなたがたも、おのおの自分の妻を自分と同様に愛しなさい。

妻もまた自分の夫を敬いなさい。

## 説教

使徒パウロは夫たちにこう言います。「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。」(25) その意味は、自分の妻を普通に「好き」になり、妻を自分の一生涯愛する伴侶と一方的に決めて愛し、妻が自分を愛してくれる時に妻を愛することは勿論のこと、たとえ妻が自分を愛してくれなくても、自分の言うことを聞かなくても、あるいは自分にあからさまに逆らっても、自分に敵対しても、自分を迫害しても、自分は妻を愛し、妻のために「犠牲を払い」、「いのちを捨てて」妻のいのちを助け出すということです。キリストは私たちを愛され、キリストは私たちのために死なれました。私たちはキリストの「アガペー-agapē」の愛を現実を受けたのです。ですから、その受けたキリストのいのちがけの「アガペー-agapē」の愛を自分の妻にあらわすよう使徒パウロは命じます。かくして、夫は、自分の妻のためには自分のいのちを犠牲にして死ななければならないというのでした。

そうして、続く26 - 27節では、夫がキリストから受けたいのちがけの愛を妻にあらわす目的が何であるかを使徒パウロは説明します。つまり、夫が妻を愛することには目的があるということです。何の意味も目的もなくただ妻を愛することは使徒パウロの命じるところではありません。ただ妻を愛すればよいというものでもありません。愛には目的があるのです。明確な意図と目的があるのです。キリストも、ただ意味も目的もなくダラダラと私たちを愛されたわけではありません。意味も目的もなく、私たちの身代わりになって十字架で死なれたわけではありません。そうではなく、はっきりとそこには意味がありました。目的がありました。このために十字架で死なれて私たちへの愛をあらわした、という目的があったのです。それは何でしょうか。キリストが私たちを愛された目的は何だったのでしょくか。キリストは何のために十字架で死なれたのでしょくか。それが、26 - 27節に、三つ記されています。

25節から通して読んでみましょう。

25. 夫たちよ。

キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。

26. キリストがそうされたのは、

みことばにより、水の洗いをもって、

教会をきよめて聖なるものとするためであり、

27. ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、

聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。

この25 - 27節までは、実は原文では切れ目なく一つの文になっております。日本語の訳文では「～するため」という言葉が二つしか出てこないのて、キリストが教会を愛して教会のために死なれた目的が二つしか出てこないように読めますが、原文では「～するため」という表現が三つ出ているので、キリストが教会を愛して教会のために死なれた目的は、二つでなく、三つとなります。

それでは、キリストが教会を死ぬほど愛された目的とは何でしょうか？その一つ目の目的は、「みことばのうちにある水の洗いによって清めてから聖なるものとするため（直訳）」です。二つ目の目的は、「栄光の教会を、彼自身が、自分自身にそば近く立たせるため（直訳）」です。三つ目の目的は、「シミやしわやそのようなものが全くなく、むしろ、聖く責められるところのないものとするため（直訳）」です。これら三つのことは、「～するため、～するため、～でなく～するため」という具合に、同じことを言い換えて、あるいはさらに詳しく解説する形で説明しているという風に読めると思います。つまり、最初に「清めてから、聖なるものとする」と言うや、続いて、「聖なるものとする」とはどういうことか、それは「御自身のそば近くに立たせる」すなわち「結婚することだ」と解説し、それから、「清める」とはどういうことか、それは「聖く責められるところのないものとする」ことであると解説するのです。（ちなみに、日本語では「清めて」「聖なるものとする」という順序になっていますが、原文では反対になっていません。語順通りの解説です。）

ですから、キリストは何のために死ぬほど教会を愛されたのか、それは、一言で言えば、「みことばのうちにある水の洗いによって清めてから聖なるものとするため」です。それじゃあ、「聖なるものとなる」とはどういうことかと言うと、それは「キリストのそば近く立つ」、すなわち「キリストの花嫁となってキリストと結婚する」ことです。そして、「清める」とはどういうことかと言うと、それは「シミやしわやそのようなものが一つもなく、むしろ、聖く責められるところのないものとなる」こととなります。それでは、一つ一つ見ていくことにしましょう。キリストはいったい何のために死ぬほど教会を愛されたのか、その目的は、一言で言えば、「みことばのうちにある水の洗いによって清めてから聖なるものとするため」です。「みことばのうちにある水の洗い」とは、「福音を信じて洗礼を受ける」ことを意味すると考えられます。旧約の預言書エゼキエル書には、こうあります。「わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがたはすべての汚れからきよめられる。わたしはすべての偶像の汚れからあなた

がたをきよめ、あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。」エゼキエル 36 : 25

ちなみに、洗礼の「水」が意味するところのものは、私たちの罪を贖いきよめるキリストの血です。キリストの血が振りかけられて、私たちの罪が贖われ、キリストとの契約の中に入れられます。そうして、罪深い私たちは、すべての罪をきよめられて、「聖なるものとなる」、すなわち「神さまのものとなる」のでした。それが、「みことばのうちにある水の洗いによって清めて聖なるものとする」ということですよ

それでは、「聖なるものとする」とは、具体的にどういうことでしょうか？それが、「**栄光の教会を、自分自身のそば近くに立たせる**」ということですよ。これは、すなわち「自分のそば近くに立たせる」とは、結婚式をする際の光景だと考えられます。「聖なるものとする」とは「神さまのものとする」という意味ですが、それは具体的には結婚をするということですよ。「自分自身のそば近くに立たせる」とは、厳密に訳すと「彼自身が、自分自身にそば近く立たせる」と極めて力を込めた強調表現となっています。花嫁なる教会を御自身の横に立たせる花婿キリストの意気込みというか勢いが表現されているのです。花嫁なる教会をご自分のみそば近くに立たせるのは、他にもないキリスト御自身ですよ。教会が自分から進んでキリストのみもとに近づいたわけではありません。もっとも、罪深い教会が自分からキリストのみもとに近づこうとしても、そんなことは許されるわけがありません。キリストが、教会を選び、召し、みもとに近づけ、みそば近くに立たせてくださったのでした。このように、教会がキリストの花嫁と成り得たのは、ただキリストの恵みですよ。しかもそれは100%のキリストの恵みですよ。キリストの全面的な助けがあって成り得たことですよ。私たちの自発性とか自主性、功績が、多少なりとも救いに貢献したわけではありません。私たちの行いは、ほんの少しも、ただの1%たりとも、全く、全然、貢献しませんでした。「彼自身が、自分自身にそば近く立たせる」と使徒パウロが表現するように、キリストだけが、キリストただおひとりが、ひたすらこのために労苦して、犠牲を払って、花嫁のためにいのちを賭けて、否、花嫁のためにご自身のいのちを捨てて、花嫁を死ぬほど愛して、教会を御自身の花嫁としてくださったのでした。私たちには借金がありました。罪の借金ですよ。その罪の借金はあまりに多額の借金で、自分では到底返済することができません。ですから、このままでは返済できずに神の怒りの炎に包まれた永遠の牢獄に投獄されねばなりません。そのような罪深い私たちと結婚するということは大変なことですよ。なぜなら、私たちの抱えている借金をすべてその人が肩代わりして返済することになってしまうからですよ。

しかし、キリストは、そのような私たちを花嫁として娶ってくださいました。ご自身の血をもって私たちの罪を贖い、ご自身が私たちの罪の身代わりに死ぬことで、私たちの借金を全額支払ってくださいましたのでした。そうして、罪贖われた栄光の教会を、「彼自身が、自分自身にそば近く立たせて」くださったのでした。

それでは、三つ目の目的として描かれている、「**シミやしわやそのようなものが一つもなく、むしろ、聖く責められるところのないものとする**」とはどういうことでしょうか。

これは、一つの意味としては、「信仰義認」、すなわちキリストが罪を贖った結果として、究極の意味に於いて、すなわち（人目ではなく）神の目には完全に罪のない者と認められているということの意味と考えられます。キリストの血を振りかけられると、私たちの「すべての罪」はきよめられます。「わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがたはすべての汚れからきよめられる。 わたしはすべての偶像の汚れからあなたがたをきよめ、あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。」「御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。」（ヨハネ 1:7）しかし、もう一つの意味としては、今現在、イエスキリストの福音を信じて神の目に「義と認められ」ていて、これから後、世の終わりに於いて、一切の罪のない者へと全く新しく造りかえられるとしても、その間のこと、すなわち「義と認められて」から「全き聖き者」となるまでの、私たちキリ

スト者の「聖化」を意味していると考えられます。

キリストは、御自身の血をもって教会の罪を贖い、御自身の花嫁として最もそば近くお召しになるだけではありません。私たちと共に生き、共に歩み、共に生活して下さる中で、すなわち具体的な私たちとの家庭生活、結婚生活の中で、私たちの信仰を成長させ、私たちを清めて、「聖化」させてくださるのです。「聖化」とは、キリストに似た者へと造り変えられていくことです。もともと悪魔のように生きてきた私たちが、神のように、キリストのように生きる者へと新しく造り変えられていくことです。「シミやしわやそのようなものが一つもなく」の「シミ」は、モラルに於ける「汚れ、傷、欠陥」を意味します。「しわ」は、「教会の証言、一致、交わりを損なうもの」の隠喩です。

「むしろ、聖く責められるところのないものとなるため」の「聖く」は、「この世から取り分けられて神さま御自身のものとなる」という意味です。「責められるところのないもの」とは、「(いけにえの)傷のない、(モラルに於いて)欠点のない者」の意味です。

つまり、愛に於いても、義においても、完全な者を目指すというのです。キリストの嫁にふさわしく、キリストに似た者となるというのです。キリストは「恵みとまことに富んでおられた」お方でした。愛に於いても、義に於いても、完璧なお方でした。別の表現で言い直すならば、「神と人とを愛する」お方でした。「十戒」を守るお方でした。そのキリストに似た者となっていくこと、キリストのようになっていくこと、キリストのように「神と人とを愛する」者へと新しく造り変えられていくこと、それが「聖化」です。

そして、使徒パウロは、私たちの主イエスキリストが、そのためにご自身のいのちをお捨てになったと言います。すなわち、私たちを「聖化」するために、私たちを死ぬほど愛されたと言うのです。キリストが私たちを愛して、惜しみなく犠牲を払い、ご自分のいのちまで犠牲になされたのは、私たちの罪を贖い、婚姻の契約を結んで私たちと共に生き、そうして私たちを御自身に似た聖い者へと清めて「聖化」するためです。

これは注目すべき点だと思います。私たちは、キリストの恵みを考える時、キリストは私たちのために十字架に架かって死んで私たちの罪を贖い、永遠のいのちを与えてくださったと告白します。主は私のためにいのちを捨てて十字架に架かって死なれるほど、この私を愛してくださったと告白します。それはすばらしいことです。どんなに感謝しても足りないほど、とてつもない恵みです。それで、神さまに感謝します。神さまをあがめます。

しかし、そこで終わってしまっただけでは、ほんとうは充分ではありません。要するに、中途半端です。まだ半分です。半人前なのです。救われてはいても、まだまだはな垂れ小僧なのです。それでは、残り半分とは何でしょうか？ どうすれば一人前になれるでしょうか？ それは、その人自身も「他の人を愛する」者となる時です。自分が神さまに愛されていることに心から感謝して、自分も喜んで「神と人を愛する」者となる時です。自分が人から何かしてもらおうとか、褒め言葉を期待するとか、認めてもらおうとか、愛されることを期待するのではなく、自分が人にしてあげ、人を受け入れ、人を赦し、人を認め、人を褒めて、人を愛する、自分が人に祝福をもたらす者となるのです。私たちの主イエスキリストがそうなさったように、「神と人を愛する」者となる時、その人は「一人前のクリスチャン」と言えるのです。そして、イエスさまのように「神と人を愛する」者となっていくということが、信仰の成長であり、きよめであり、「聖化」です。主イエスキリストは、私たちがそのような者となっていくために十字架で死なれた、とパウロは言います。すなわち、私たちが「神と人とを愛して」神の栄光をあらわす者となるために、十字架で死なれた、私たちが「神と人とを愛して」神の栄光をあらわす者となるために、私たちを愛された、と言うのです。キリストに似た者となる、キリストのようになっていく、キリストのように「神と人とを愛する」者となる、この「聖化」ということが、キリストが私たちを死ぬほど愛された目的だっ

たとパウロは言うのです。

そうして、そのように妻を愛するよう、使徒パウロは夫に命じたのでした。

## 25. 夫たちよ。

**キリストが教会を愛し、**

**教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。**

そこで命じられている「アガペー-agape」の愛は、妻を限りなく愛し、妻のためにはいかなる犠牲をも厭わず、毎日妻のために犠牲を払い、いのちまでも喜んで犠牲にする愛ですが、同時にその愛は、妻が罪を犯して神のさばきを受けて滅びないよう、妻のいのちを救う愛です。妻が、キリストのように「神と人とを愛する」者となるよう、妻を聖める愛です。妻の信仰を成長させる愛です。妻を「聖化」させる愛です。「愛は人の徳を建てる」(コリント 8:1)のです。

これは大きなチャレンジだと思います。夫は深く反省を迫られます。自分ではなく、自分の妻は信仰が成長しているだろうか、神と人を愛する者となっていったらだろうか、もしそうでなければ、夫の愛が足りなかった、あるいは間違っていたのではないかと反省させられます。

コリント 11:7 節には「男は神の似姿であり、神の栄光の現われ」で、「女は男の栄光の現われ」だ、とあります。夫は神さまの栄光を反映し、**妻は夫の栄光を反映する**、ということです。ですから、その夫の信仰がどうであるかは、その妻を見たらわかるのです。

こういう話があります。私たちが天国に着いて主にお会いし、「私はあなたのために、これこれこういう良い働きをしてきました。」と報告する時、イエスさまはその報告を聞いて、あくびをしながら、「そういう話には興味がありません。あなたの妻を見れば、あなたがどう生きてきたかがよくわかります。」と言われるというのです。そうして、さらにイエスさまはこう言われるといいます。「あなたの妻がどんなであるかは彼女の口から話を聞く必要もありません。ただ見るだけでわかります。彼女の顔が、霊の状態が、感情の様子が、夫がどんな風に生きてきたかを雄弁に語っていますよ。」

夫は神の栄光をあらわし、妻は夫の栄光をあらわす、夫には、経済的に妻を養う責任もあるかも知れないけれど、同時に、霊的に妻を養う責任もあるのです。妻の信仰が成長していなければ、それは夫の責任です。妻の信仰が悲惨な状態であるならば、それは夫が妻を愛さないからです。神の愛をもって愛さないからです。キリストの愛をもって愛さないからです。「アガペー-agape」の愛をもって愛さないからです。愛されていないから、愛することができないんです。愛を受けていないから、神を愛することも人を愛することもできないんです。「**キリストが教会を愛し、 教会のために御自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。**」キリストがそうされたのは、みことばのうちにある水の洗いによって清めてから**聖なるものとするため**であり、栄光の教会を御自身に向かって**立たせるため**であり、シミやしわやそのようなものが何一つなく、むしろ、**聖く責められるところのないものとするため**です。そのように、夫も自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。

ここに集う、夫のみなさんひとりひとりが、みことばの通りに、ご自分の妻を大切に愛されて、神の栄光をあらわす良き家庭を築いていけるよう、主の御名により祈ります。